

万葉の泰平に眠る世は太子一族全員の自決によって覚醒する。

この事件が天皇国の理念を太子の死後20年にして中大兄皇子の胸中に燃え上がらせた。

しょう ぐう

上宮王家の悲劇

最終回

天皇国日本の船出——太子一族の最期——

広報対策担当 副会頭
「輝くなにわ」編集委員長

野瀬 泰良
(霊園経営者)

しょうめい

舒明天皇と万葉の時代

聖徳太子、山背大兄(やましろのおおえ)に二代に渡る上宮(しょうぐう)王家の歴史をまとめた連載の最終回としては奇妙な書き出しだが、宝皇后の第一子、中大兄皇子(天智天皇)の誕生が舒明(じょめい)即位3年前の626年だという点を筆者が見落としたため、今回は読者に勘違いをさせたことを先ずお詫びしなければならない。蘇我蝦夷(えみし)によって宝皇后が高向王と離別させられ、田村皇子様に再嫁されたのは、少なくとも馬子が死亡する前の625年以前の事だった。それにつけても蝦夷の用意周到ぶりには舌を捲く。

舒明天皇の即位が629年、天皇には伯父の娘にあたる宝皇女が皇后となられたのは不思議にも1年後の630年。さて田村皇子(舒明天皇)に再嫁のとき、記録によれば宝皇女様は先夫と離別ではなく死別とある。結婚したばかりの夫婦が死別とはこれいかに。仮に田村皇子様とのご縁談があったにせよ、一時皇太子であられた皇子の父君は未だ行方知れず、身寄りの無い田村様よりも独身の宝皇女様が高向王様を伴侶に選ばれたのは自然のこと。

ところが蘇我氏の中に馬子に反抗して太子を嫌う蝦夷という異端

者がいて、太子ご一族へのあてつけか、秘かに孤児の田村皇子様を拾い上げ、祖父の代より一族挙げて支えてきた欽明(きんめい)王朝の王位継承者であられた太子一族の上宮王家には一瞥(いちべつ)もくれず、わざわざ非蘇我系の田村皇子を御位につけたのだ。

その日のために蝦夷は夫と離別して頂いてまで非蘇我系皇女を田村様に嫁がせていたことになる。もし読者が宝皇女先夫の高向王なら、こんな理不尽を承服できようか。皇族ならずとも男性の誇りがあるならば、このような屈辱に耐えきれず、自ら命を絶つやもしれぬ。宝皇女様再嫁の前後には、こんな悲劇なドラマがあったかもしれない。だがそれを明らかにする記録は残っていない。

さて万葉集の研究家であって晩年には教団(しんぐん)生長の家(せいちょうのけ)の理事長を勤められた山口悌治先生は、著書「万葉の世界と精神」の中で、万葉集には若干古い時代の歌も載せられてはいるが、特色ある万葉和歌が多数詠まれるのは舒明天皇の時代からだと言われる。天皇が大陸文化の流入に消極的だったとは思わないが、国風文化が華開いた時代ではある。国民が詩歌に親しむ文化の浸透があるほど平和な時代であったのは明らかだ。

だが全く争乱が無かった訳ではない。636年、舒明天皇は百官の司(つかさ)たちの礼儀作法が弛(ゆる)み出したことを、群臣の長である大臣(おおみ)の責任だと蝦夷を非難された。だが蝦夷には天皇ご立腹の理由が呑み込めない。群臣たちが上下の隔てなく和気あいあいと仕事に励めるのを謳歌(うたか)したいくらいだった。日が昇らぬ早朝から百官を集めて仕事始めとなす「朝参」の儀にも、遅刻者が続出する始末。そのたびに天皇からお叱りを受けたことで嫌気がさしたか蝦夷は翌年から昇殿しなくなり、自ら「大臣(みん)職を有名無実にした。天皇はそんな蝦夷を懲らしめるため、上野毛形名(かみつねのかたな)を将軍にして蘇我の館を攻めさせられた。蝦夷はさんざん上野毛軍に痛めつけられ、分家の境部(さかいべ)が滅びたことで大きく傾いた蘇我家を更に弱体化させるに至った。

皇極女帝の即位と新世代の台頭

舒明(じょめい)天皇と皇后との間には中大兄皇子と間人(まひと)はしひと)(太子生母と同名だが、太子生母は穴穗部間人と呼んで区別する)皇女がお生まれであった。また蝦夷の妹、法提郎女(ほてのいらつめ)夫人の胎(はら)からは、それよりも早く古人大兄皇子がお生まれだった。さて舒明天皇が即位されて13年、天皇は俄かに病に倒れられた。中大兄皇子には秘かに伊勢の豪族に育てられた大海女(おおあま)皇子という弟君がおられることを皇后様が明らかにされたのは、このような微妙な時期であった。

上宮王家の山背大兄(やましろのおおえ)オオエは皇太子あるいは皇太子候補の意味)



法起寺、法輪寺からの古道から法隆寺を遠望。山背大兄が命懸けで消失から守った太子建立の法隆寺は残念ながら大化の改新の後に失火で全焼した。現在の法隆寺は持統天皇並びに藤原不比等の号令で再建されたもの。

それを聞いて山背大兄皇子はこうおっしゃった。

「そのようなことを口にした覚えは誓っていないが、入鹿が進める改革が全くの似非改革だというのはその通りだ。我が国を氏姓制度を廃して律令国家、即ち父上の提唱なされた『天竺国日本』とするならば、先ずは国土と人民を国家に帰属させねばならぬ。即ち豪族たちが私有する領地領民の総てを国家に返上させねばならない。これはもう改革ではなく、血で血を洗う革命なのだ。陛下には悪いが豪族の長などにできることではないのだよ。」

数十人の奴(やっこ)たちが必死に防戦する間、上宮王家の方々は裏の矢田山の山道に身を隠して平群(へぐり)の谷へと落ちのびられた。ご家族がいずれかの宮殿に隠れたと思ひ込む兵らは、ひとつひとつ建造物を焼き払った。四日も経てば広大な斑鳩(いかるが)宮も跡形も無く焼け野原となった。次に兵らは隣の法隆寺の山門を叩き壊し、境内に侵入するや、無数のお堂の周りに焚き木を積み上げ始めた。太子の英知と労苦の結晶である飛鳥文化の歴史遺産を何の躊躇(ためらい)もなく焼却するかのよう。

そこへ山背大兄一家が飢えに苦しみながら、ひょっこりと戻って来られた。どうやら誰一人救いの手をさしのべなかったようだ。皇子様には春米(つきしね)妃と7名のお子様たち、それに加え皇子様ご兄弟やその子供たち、合わせて23名ものご家族が皇子様に従っておられたと言う。平群(へぐり)からお戻りになるとするとき、山背大兄は幼いお子様から、何故戦わないのか? と尋ねられ、次のように答えられた。「吾らの命を長らえるため、召使や領民たちが敵と戦い、命を無くすことがあるならば、あの世で仏様やお父上に合わず顔がないからね。だから戦わぬと決めたのだよ。」

だが夫人や成人したご兄弟には腹中を明かされ、このようにおっしゃった。

「斑鳩宮が炎上した上は、御父上の著作や収集物が残される法隆寺だけでは何としても焼失を免れさせたい。だからこれから再び斑鳩に戻ろうと思うのだ、氏姓制度を廃止させ我国を真の律令国家とする使命が吾らにあるならば、ここで命を惜しんで節を曲げるは如何なものか。今まさに『天竺国日本』が誕生する陣痛が始まったのだ。この国を父上が理想とされた独立国家にするためにも、ここは吾らが生きるべきか、死ぬべきか、よく考えねばならぬ。陛下ご自身と陛下がお生みになった二人の皇子様に、あるべき国体について真剣にお考え頂けるなら、吾ら喜んで誕生する天竺国日本の人柱と成ろうではないか。」

ご家族と共に法隆寺に戻られた皇子様は境内を固める寄せ手の兵らに告げられた。

「身支度したら捕らわれようほどに、しばらくの猶予を下され。それまでは国の宝が詰まったこれら御堂には火をつけること無きよう固くお約束願いたい」とおっしゃりながら、ご家族とともに小さなお堂に入られた。



天下に大化改新が号令された難波宮大極殿の跡。中大兄や鎌足らによる命懸けの偉業の成果を横取りする形で軽皇子様が孝徳天皇として即位なされたのだが、その後も皇太子との主導権争いが続き、7年後、皇太子が鎌足や間人皇后まで連れて飛鳥に還ってしまわれると百官の司たち皆飛鳥に逃げ帰ってしまい、一人王宮に残された天皇はついに悶死されたと伝える。これも因果応報と言うべきか。

兵士らは皇子の言には耳を疑い、顔を見合わせた。自ら投降されても拷問による取り調べが待っている。幼き子供たちであっても容赦はない。揃って華鬘(きやしや)なお体である。ひとたび拷問を受けるなら、自白なさる前に皆息絶えるであろう。そんなことも分からないほど皇子様は世間知らずであったのかと。

だが何時までお待ちしても、ご一家は姿をお見せにならなかった。やがてそのお堂から突然煙が上がったかと思うや、屋根まで真っ赤な炎に包まれた。慌ててお堂に駆け寄った兵士らが燃え盛る炎の影に見たものは、首を絞められ息絶え、床に置かれた幼き子供たちの遺体と、お堂の梁にひもをかけ、首をつっておられたご夫婦に、ご兄弟たち、そして大きくなられたお子様たちの遺体であった。

欽明王朝の正統なる皇位継承者、上宮王家一族自決の報に入鹿は茫然自失となり、事前に何ひとつ聞かされなかった蝦夷は半狂乱になって入鹿の愚行をなじったが、時既に遅しと言うべきだった。気がつくくと蘇我は天下を敵に廻していた。中大兄皇子も入鹿や古人大兄には激しい増悪と敵意を感じられるとともに、太子一族が全員自決してまで何を訴えたかったのか、その意味を心して考えられることになった。

エピローグ 天竺国日本の船出

上宮王家の自決から2年後の645年6月、蘇我入鹿は飛鳥板蓋宮にて、緻密なクーデター計画を練っていた中大兄皇子、中臣鎌足らによって女帝の面前で暗殺された。大化の改新の発端となる乙巳(いっし)の変である。蝦夷は遂に蘇我の滅亡の日が訪れたことを悟り、息子入鹿の首が晒される飛鳥寺山門を見下ろす甘樫岡の邸宅に火を放って自殺した。古人大兄皇子も吉野に逃げたが、中大兄が差し向けた兵に追いつかれ斬殺された。皇極女帝は一連の事件の責任をとられる形で退位を宣言され、中大兄皇子に禅譲しようとなさったが、固辞されたため、中大兄を先ずは皇太子にされ、弟君の軽皇子様に御位を譲られた。第36代、孝徳天皇である。

孝徳天皇は我が国で初めての年号「大化」を制定され、都を難波に移された。翌646年1月、改新の詔(みことのり)が宣布された。その崩御の後、655年には皇極女帝が再び即位なされて都を飛鳥に戻された。第37代、斉明天皇である。乙巳の変から23年後にして中大兄皇子こと天智天皇が即位なされ、壬申の乱を経た時に弟の大海女皇子が即位なされた。

大海女皇子はこれまでの大王(おおきみ)の称号を廃して、初めて自ら天皇と称され、国号を日本国と定められた。そして歴代の天皇方に和風と漢風の諡号(しごう)を贈るように官僚や学者たちに命じられた。初代の磐余(いわれ)の大王(おおきみ)には自ら「神武」の諡号を贈られ、一方ご自分の諡号には「天武」をお選びになった。

我が国の総ての領土人民が豪族たちの手から離れ、国家のもとに帰属する「公地公民の制」が緩やかに全国に拡がり、律令制度が完成の域に達したことを示す「大宝律令」が天下に発布されたのは、天武天皇の次に即位された皇后(天智天皇次女)の持統天皇が、孫の文武(もんむ)天皇に譲位され、自らは太上天皇となられた平城京遷都直前の702年のことである。

さて天武天皇に大王の称号や国号の変更を提案なされたのは、兄君の天智天皇(中大兄皇子)であったと言われる。では中大兄皇子様に、太子の言霊による「天竺国日本」の理念を一体誰が伝えたのだろうか。後に宮殿内では百濟(ひゃくせい)くだら 語を公用語にされる程の異国がぶれと陰口たたかれるバサラ青年だった皇太子が、太子が残された古文書を読み漁ったとは考えにくい。聖徳太子が理想とされた国家像を説き明かすメッセージを中大兄皇子様にお伝えしたのは、入鹿が大臣となった頃、一族の滅亡を予感された山背大兄皇子その人であったと考えるのが自然なのではないだろうか。(上宮王家の悲劇 完)